

## 第9回安全計画シンポジウム「ガラスの安全性」

建築計画委員会 安全計画小委員会

標記シンポジウムは、1994年9月21日（水）に建築会館ホールにて65名の参加者を集めて開催された。このシンポジウムは、ガラスが本当に安全に利用されるようになっていくかを考え直すとともに、新しいガラスの技術について5人の識者に意見を発表していただいた。

### 新しいデザインは新しい危険を生む—無意識的な変化の対応 坂本功（東京大学）

事故は、新しい材料や工法が意図的に開発されたときには発生しないが、それが不特定多数の建物に普及し使用されると怒る。それは、以下の理由による。①表面上の技術しか伝わらない。②工法・材料を使用する局面の変化。③デザインの潮流・生活様式の変化。

### 火災とガラス—その特性と新技術 大泉維宏（セントラル硝子）

防火ガラスについて、要求される防火性能から2つに分類し、その特性、問題点について述べる。①火災加熱によって割れないか、割れても崩壊せず遮炎性を発揮する単板ガラス。②火災加熱によって割れるが崩壊せず、遮炎性と同時に遮熱性を発揮するガラス。

### 日常災害とガラス 直井英雄（東京理科大学）

人とガラスの関係が変わり、昔と比べ今日では、ガラスは厚く大きくなり割れる頻度は下がったが、割ってしまうと大きなけがをするようになった。この危険を減らすために、割れると危険な場所についてはわれない、または、割れても安全なガラスを選定する。

### ガラスによる外装設計 横田暉生（日建設計）

欧米のガラスは豊富であり、その利用も、DPG工法の抜けの良い外構部、SSG工法のフラットな外装、ガラスを構造体としたモニュメントなどさまざまである。日本でも、ガラスのみによる屋根や空調ダクト、ボックスを創ることも試みている。

### 建築用ガラスの現状と将来—法規制などソフトな側面から 宍道恒信（建築家）

建築家がガラスを使う理由は、ガラス自体を意識させない効果を利用することである。つまり、①透明感、②軽量感、③平滑感、④不安感。この効果によりガラスの事故は起こるが、その規制は法に頼るのではなく、建築家が建物ごとに決めていくのが良い。

### 質疑応答とまとめ 司会 古瀬敏（建築研究所）

海外製品に対する規制緩和、シール等の寿命、DPG工法の将来性、防火ガラスと甲防、

ガラスの輻射熱遮断、倍強化ガラスなどについて、さまざまな質問応答があった。まとめとして、昔と今では、ガラスの利用のされ方が、設計者と使用者でともに変わってきている。また、安全に対する検討はまだ十分といえないので、今後もガラスの可能性をつぶすことなく、続けて考えてゆきたい。

野原聰哲／竹中工務店